

## 陸機擬する所の古詩について

柳川, 順子  
広島女子大学 : 助教授 : 中国古典文学

<https://doi.org/10.15017/9633>

---

出版情報 : 中国文学論集. 28, pp.1-18, 1999-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 陸機擬する所の古詩について

柳 川 順 子

陸機（二六一—三〇三）の「擬古詩」は、その大部分に相当する十二の詩篇が『文選』（卷三十）に収録され、また『詩品』の序論には「五言の警策なる者」「篇章の珠澤、文彩の鄧林」と絶賛されている六朝詩の名作である。陸機の代表作の一つにも数えられるこの作品には、作者の学問的素養が存分に発揮されているように看取されるが、それでは、この渾身の力作を成すに当たって、陸機はどのような基準に拠ってその模擬対象を選び取ったのだろうか。この問題について、私は次のように考える。すなわち、漢魏六朝時代を通じて、数ある古詩の中でも特別な一群として別格視されていた古詩群があり、陸機は、この既成の価値評価に準拠して、その特別な古詩群をまるごと自らの模擬対象としたのである、と。本稿の眼目は、私がこのように推定する根拠を示し、その可否を検討することにある。

さて、後漢末の建安文壇以降、魏晋南北朝時代に渡って、文学の主流ジャンルは賦から五言詩へと移行していったが、言うまでもなく古詩はこの五言詩の祖である。ところが、文学史上かくも重要な意義を持つにも関わらず、五言古詩の成立経緯、及びその年代については、これまでも幾多の論考が発表されながら、今もなお定説を見えないのが現状である。本稿が提示する推論は、陸機の「擬古詩」に着目することによって、従来とかく漠然と一括りにされてきた古詩という作品群を、より淵源に近い詩群と、そうでないものと二分しようとするものであるが、この推測がもしさほどの外れでない論証されるならば、陸機は、五言古詩の文学史的位位置について模索する我々のために、一つの有力な足掛りを残しておいてくれたことになるだろう。本稿では、陸機の擬する所となった

陸機擬する所の古詩について（柳川）

古詩について考察を進めながらも、更に一步踏み込んで、五言古詩の成立経緯という文学史的難問題についても、屋下に屋を架することへの譏りは覚悟の上で、私なりに若干の見通しを述べてみたい。

一

陸機の「擬古詩」は、『文選』卷三十所収の十二首「擬行行重行行」「擬今日良宴會」「擬迢迢牽牛星」「擬涉江采芙蓉」「擬青青河畔草」「擬明月何皎皎」「擬蘭若生朝陽」「擬青青陵上柏」「擬東城一何高」「擬西北有高樓」「擬庭中有奇樹」「擬明月皎夜光」に加えて、「駕言出北闕行」の一首が、擬「驅車上東門」として推定されている。<sup>1)</sup>さて、ここに挙げた「擬古詩」十三首を通覧するに、その模擬対象となった古詩群において、その全首を貫く内容的首尾一貫性は見出し難い。ということとは、陸機は決して、初めに何か表現したいテーマがあって、それを盛るにふさわしい内容の古詩を選び取ったわけではないことである。それでは、文学作品としての完成度の高さを基準に模擬対象を選抜し、それらとの対比において、自らの修辭技巧を誇示しようとしたのかというと、これもまた的中はしないように思われる。というのは、陸機の模擬対象とならなかった詩篇の中にも、「古詩十九首」(『文選』卷二十九)に選ばれている佳作や、後述の『詩品』において高い評価を贏ち得ている絶品が含まれているからである。それではいったい陸機の選択基準はどこにあったと考えるのが妥当か。そこで注目したいのが、鍾嶸(？—五一八)の『詩品』上品、古詩の項に見える次のような論評である。

陸機擬する所の十四首は、文は温やかに以て麗しく、意は悲しくして遠し。心を驚かし魄を動かし、一字千金に幾しと謂ふ可し。其の外、「去る者は日に以て疎し」などの四十五首は、哀怨多しと雖ども、頗る總雜と爲す。舊くは是れ建安中の曹(植)・王(粲)の製りし所ならんかと疑はる。「客、遠方従り來たる」、「橘柚は華實を垂る」は、亦驚絶と爲す矣。人も代も冥滅して、清音獨り遠し。悲しき夫。

鍾嶸は、陸機の模擬対象となった古詩十四首と、そうでない古詩四十五首とを截然と區別し、前者に対してはほとんど無条件に近い絶賛を与えているのだが、ここで注意したいことは、まるで自明のことのように、「陸機擬す

る所の十四首」という括り方が為されていることである。それはあたかも、この一言でもって、当時の誰もが特定の詩群を思い浮かべるに違いない、と踏んでいるかのような書き方であって、決して、陸機の文学的審美眼を称賛しているのでもなければ、また、たまたま陸機の擬する所となった古詩が、彼に選取られたことによって、付随的にその価値を引き上げられたと言っているのでもない。思うに、六朝人にとって「一字千金」の価値を持った古詩群が既に存在し、その作品群を一括して指し示すのに最も端的、かつ広く認知された言葉が、ここにいる「陸機所擬」だったのではないか。些か唐突に見える鍾嶸のこの切り出し方の背後には、陸機の擬する所と重なる特定の古詩群を一つのまとまりとして認識し、これを格別に高く評価する、ある文学的共通基盤が存在したことを想定せざるを得ない。

それでは、今私ここで想定した文学的共通基盤なるものは、果して当時、本当に存在したのだろうか。鍾嶸が自明のことのように一括した「陸機所擬」の詩篇は、同時代の他の人々においても同様に、一つの詩群として認識され、「二字千金」の如く別格視されていたのかどうか。結論から言えば、そのように判断してよいと私は考える。というのは、鍾嶸とほぼ同時代の文学選集『玉台新詠』も、『詩品』と同様、陸機の擬する所となった古詩を、その他の古詩とは明瞭に区別し、これに前漢屈指の辭賦作家、枚乗の名を冠しているからである。『詩品』における古詩分類の認識は、『玉台新詠』においても等しく認められる。このことを明示するために、今、陸機「擬古詩」と『玉台新詠』所収の枚乗「雜詩」、同所収「古詩」、及び『文選』所収の「古詩十九首」とを一覧表にて対照させてみたい。

『文選』卷三十 陸機「擬古詩」	『玉台新詠』卷一 枚乗「雜詩」	『玉台新詠』卷一 「古詩」	『文選』卷二十九 「古詩十九首」
擬行行重行行	行行重行行		其一 行行重行行
擬今日良宴會			其四 今日良宴會
擬迢迢牽牛星	迢迢牽牛星		其十 迢迢牽牛星

陸機擬する所の古詩について（柳川）

擬涉江采芙蓉	涉江采芙蓉	其六	涉江采芙蓉
擬青青河畔草	青青河畔草	其二	青青河畔草
擬明月何皎皎	明月何皎皎	其十九	明月何皎皎
擬蘭若生朝陽	蘭若生朝陽	其三	青青陵上柏
擬青青陵上柏		其十二	東城高且長
擬東城一何高	東城高且長	其五	西北有高樓
擬西北有高樓	西北有高樓	其九	庭中有奇樹
擬庭中有奇樹	庭前有奇樹	其七	明月皎夜光
擬明月皎夜光		其十三	驅車上東門
(駕言出北闕行)		其十一	迴車駕言邁
		其十五	生年不滿百
		其十四	去者日以疎
		其八	冉冉孤生竹
		其十六	凜凜歲云暮
		其十七	孟冬寒氣至
		其十八	客從遠方來
			上山採藤蕪
			四坐且莫諠
			悲與親友別
			穆穆清風至

さて、右の表を見るに、「今日良宴會」「青青陵上柏」「明月皎夜光」「驅車上東門」の四首は、陸機擬する所の古詩でありながら、『玉台新詠』に枚乗「雜詩」として収録されてはいない。しかしこれは、たまたまこの四首の内容が、『玉台新詠』という選集の性格に合致しないために採録されなかったに過ぎないと考えてよい。恐らく、『玉台新詠』の依拠した枚乗作「雜詩」の中には、必ずやこれら四首の詩篇も含まれていたであろう。他方、陸機の模擬対象とならなかつた古詩は、『玉台新詠』が読み人知らずの「古詩」として採録するグループに非常によく重なる。要するに、『詩品』において「陸機所擬」と言い表わされた詩群が、『玉台新詠』においては枚乗「雜詩」という呼称によって一括されていると見ることが出来る。

ところで、『玉台新詠』を傍証の資料とすることについて、次のような反論もあり得るのではないか。すなわち、『玉台新詠』は、『文選』が堂々たる正統文学の選集であるのに対して、専ら兒女の情を詠するばかりの軟派文学選集、いわば文学界の日影者である。しかも、枚乗の生きた前漢初めに整然たる五言詩が存在したはずはなく、そのような荒唐無稽の説を採るなど不見識も甚だしい。かくの如き選集は、史料として全く信頼するに足らないのではないかと。しかし、編集過程という視点から見れば、実は『玉台新詠』は、『文選』のそれよりもはるかに高い価値を持つ史料であると思われる。なぜならば、『文選』は、先行する選集の中から更に秀作を抽出した二番煎じの簡約化された選集であるが、一方の『玉台新詠』は、その序文に、

往時の名篇、當今の巧製は、諸を隣閨に分ち、散じて鴻都に在り、篇章を籍しよざされば、披覽するに由無し。是に於て脂を燃やして暝くら寫し、筆を弄して晨書し、豔歌を撰録すること、凡そ十卷を爲す。

と記すように、宮廷の書庫に眠る様々な作品集の中から直接に、いわゆる艷詩に相当する作品のみを抄出した第一次選集であるらしいからである。とすると、本選集が、「陸機所擬」の古詩群を枚乗「雜詩」として収録することには、なんらかの文献的根拠があつたと見てよい。ちなみに、古詩の作者として枚乗の名を挙げるのはひとり『玉台新詠』ばかりではない。南齊末に成つた『文心雕竜』明詩篇や初唐の『文選』李善注（卷二十九、古詩十九首）も、或説としてこのことを伝える。本当に枚乗の作であつたかどうかはともかくとして、いづれにせよ六朝当時、数ある古詩を、枚乗作の一群と、そうでないものとの二つのグループに分けて認識する説が行われていたことは確かである。

陸機擬する所の古詩について（柳川）

ろう。そして、『玉台新詠』はこの既成の古詩分類に素直に従ったのであろうと推察される。他方、鍾嶸は、枚乗作と伝えられる古詩群を一つのグループとして認識することは妥当としながらも、ただ、その作者として枚乗の名を挙げることに疑義を挟み、そこで、これに代えて「陸機所擬」という指し示し方をしたのでないだろうか。

さて、『詩品』にいわれる「陸機所擬」が「一字千金に幾き」値を持つことについて、従来の論者はとかく、これらの詩篇のほとんど全てが、古詩中の白眉「古詩十九首」の中に含まれることを強調し、以てその評価の高さを追認する根拠と為してきた。<sup>5)</sup>だが、先に挙げた対照表から明らかのように、「古詩十九首」は、陸機擬する所の古詩の大部分を包摂する一方で、彼の模擬対象とならなかった詩篇をも相当数含んでいる。つまり「古詩十九首」は、鍾嶸や徐陵らにおいて二分される古詩グループの双方に跨って秀作を選びすぎたものであって、その評価基準は、片方の古詩群に対して無条件の称賛を与える鍾嶸のそれとは一致しない。他方、既に上文に指摘した通り、「陸機所擬」の古詩群は、『玉台新詠』所収枚乗「雜詩」の方にはるかに深く重なっている。その端的な例として、陸機擬する所の「蘭若生朝陽」は、「古詩十九首」には採られていないが、『玉台新詠』には、枚乗「雜詩」の一つとして確かに採録されている。<sup>6)</sup>わずか一例ではあるが、これは貴重な事象ではないか。すなわち、『詩品』にいわれる「陸機所擬」の古詩群は、文学作品としての完成度の高さによって別格視されたのではなく、もっと別の所に特別な称賛の所以があったらしいことを、この一事象は鋭く示唆しているのである。陸機がこの古詩群を模擬対象に選んだ理由も、必ずや鍾嶸のこの評価の根拠に一致するものであろう。

以上を要するに、『詩品』古詩評において鍾嶸が前提にしたと見られる共通認識、すなわち、陸機の擬する所となった諸作品は、古詩の中でもある特別な価値を持つものとして一つの詩群を為すとする認識は、『玉台新詠』、そして恐らくはその編集母体となった諸々の作品集においても、確かに認められるものであった。この共通認識は、六朝末のみならず、魏晋南北朝時代全般に渡って広く行われていたと考ええてよい。陸機は、当時の誰もが自明のこととして別格視した一群を、一括してその「擬古詩」における模擬対象に取り上げたのだと推定される。それでは、この第一古詩群と称すべき作品群は、いったいどのような性格を持つが故に、六朝当時から高い評価を付与されていたのだろうか。

『詩品』において「陸機所擬」と括られ、また『玉台新詠』においては枚乗「雜詩」と総称せられる古詩群は、六朝時代、その他の古詩を圧して別格視されていたが、この第一古詩群の性格を明らかにするため、ここで一旦、陸機擬する所の古詩群から離れ、彼の模擬対象とはならなかったものの方へ目を転じてみよう。先にも触れた通り、陸機擬する所の第一古詩群は、いくらこれを凝視してみても、そこに通底するテーマも詩篇相互の繋がりも一向に見えてこないのだが、見方を変えて、第一古詩群に焦点を合わせながら、更にこの作品群の周囲に点在するその他の古詩、及び古歌や古樂府、漢魏の文人による作品にまで視界を広げ、それらとの関連性を修辭的側面から探ってみると、第一群古詩の中から幾つかの基本的発想パターンや特徴的な措辭を抽出することができる。そして、これら第一群古詩の中核を為すと思われる修辭・発想様式は、「陸機所擬」から外れるその他の古詩の随所に、様々に改変された姿となつてその片鱗を覗かせているように看取される。このことに着目し、第二グループの古詩の吟味を通じて、間接的に第一古詩群の輪郭を照らし出そうというのが本章の狙いである。

そこでまず取り上げるのは、『玉台新詠』に読み人知らずの「古詩」として採録され、『文心雕竜』明詩篇では後漢の傅毅（一八九〇）の作と断定されている「冉冉孤生竹」詩である。

冉冉孤生竹 冉冉たる孤生の竹

結根泰山阿 根を泰山の阿に結ぶ

與君爲新婚 君と新婚を爲すこと

兔絲附女蘿 兔絲の女蘿に附くがごとし

兔絲生有時 兔絲の生ずるには時有り

夫婦會有宜 夫婦の會するには宜しき有り

千里遠結婚 千里に遠く婚を結び

陸機擬する所の古詩について（柳川）



悠悠隔山陂 悠悠として山陂を隔つ

思君令人老 君を思へば人をして老いしむ

軒車來何遲 軒車の來ること何ぞ遅き

傷彼蕙蘭花 傷む 彼の蕙蘭の花の

含英揚光輝 英を含みて光輝を揚ぐるも

過時而不采 時を過ごして采らざらんば

將隨秋草萎 將に秋草に隨ひて萎へんとするを

君亮執高節 君 亮まことに高節を執れば

賤妾亦何爲 賤妾 亦何をか爲さん

この詩篇でまず目を引かれるのは、九句目の「思君令人老」である。この句は、第一群古詩「行行重行行」にも見えるものであつて、このことは、兩詩の間に強い影響關係のあることを示唆する。同一句を用いるばかりでなく、男女の離別を詠ずることにおいても、本詩はかの詩を彷彿とさせる。ただ、「行行重行行」詩は本来、死者への追慕を主題とする文芸の血筋を濃厚に引くものであつたと推察されるが、本詩では、このテーマが地上に引き下ろされ、死者の魂魄と生ける者との交感が、現実の夫婦愛へと転換せられている。第一群古詩に色濃く残る呪術的発想を、自らが住まう人間世界に引き付けて改変している点において、本詩はかの詩の後続作品と見ることができよう。

他方、十一句目「傷彼蕙蘭花」以下の四句を見るに、これは、第一群古詩「涉江采芙蓉」にいう「采之欲遺誰、所思在遠道」、同「庭中有奇樹」詩にいう「攀條折其榮、將以遺所思」を念頭に置きつつ、この「花を折り采つて、遙か遠方にいる思う所の人へ送り届けたい」という発想パターンにひねりを加えたものと看取される。第一群古詩に見えるこの特徴的な措辞は、『楚辭』九歌、山鬼にいう「折芳馨兮遺所思」、及び同九歌、大司命にいう「折疏麻兮瑤華、將以遺兮離居」を踏まえたものであり、ここでは詩中の詠じ手が花を折り采るのであつたが、本詩では、詠者が自らの身を折り采られるべき花に喩えている。また、第一群古詩が空間的隔たりを強調することに傾きがちであつたのに対して、本詩は、東方朔「七諫」沈江にいう「秋草榮其將實兮、微霜下而夜降」を用いながら、時間

的推移、華の凋落というテーマをより強く前面に打ち出している。こうしてみると、本詩のこの一節は、かの第一群古詩の提示する基本パターンを踏まえつつ、これに大胆な加工を施したものと見られ、そうだとすると、改変の手を経た本詩は、そのもととなった第一群古詩よりは明らかに遅れて成ったものだと判断されよう。

以上、比較的顕著な事例を指摘してみたが、このように「冉冉孤生竹」詩は、第一群古詩「行行重行行」を祖述しつつ、更に別の第一群古詩「涉江采芙蓉」「庭中有奇樹」に見える特徴的発想パターンをもアレンジして取り込んでいる。このことは、本詩が古詩の中でも比較的新しい時代に成った作品であることを示唆しているが、これを逆の視点から見ると、第一群古詩は、陸機の擬する所でない第二グループに属する本詩よりも先に成立しており、しかも、本詩の成った時点において、既に複数の素材を並列して提供し得るだけの、あるまとまりを為す作品群として流布していた、と言ひ替へることもできよう。

これに類似する例として、たとえば第二グループの古詩「凛凛歲云暮」には、結びの四句「眴眴以適意、引領遙相睇。徙倚懷感傷、垂涕沾雙扉」に、第一群古詩「明月何皎皎」の結び「引領還入房、淚下沾裳衣」の変奏を、「亮無晨風翼、焉能凌風飛」という句に、同「西北有高樓」詩にいう「願爲雙鳴鶴、奮翅起高飛」の片鱗を認めることができる。また、同じく第二グループに属する「新樹蘭蕙葩」詩（『古詩紀』卷二十）では、前述の「涉江采芙蓉」詩に見える特徴的な措辞「采之欲遺誰、所思在遠道」をそのまま用いて同詩を祖述しながら、これに第一群古詩「迢迢牽牛星」に見える「終日、章を成さず」という発想や、華や香の移ろいやさという新たなテーマを加味していることが看取される。

陸機の模擬対象から外れる古詩は、概ね第一古詩群よりは遅れて成ったものと考えてよいのではないか。このことを推測させる今一つの例として、鍾嶸が第二グループの筆頭に掲げた「去者日以疎」詩を挙げることもできる。

去者日以疎 去る者は日に以て疎く

生者日以親 生くる者は日に以て親し

出郭門直視 郭門を出でて直に視れば

但見丘與墳 但だ丘と墳とを見るのみ

陸機擬する所の古詩について（柳川）

古墓犂爲田 古墓は犂かれて田と爲り

松柏摧爲薪 松柏は摧かれて薪と爲る

白楊多悲風 白楊に悲風多く

蕭蕭愁殺人 蕭蕭として人を愁殺す

思還故里閭 故の里閭に還らんと思ふも

欲歸道無因 歸らんと欲して道に因るべき無し

まず、七・八句目に見える「白楊多悲風、蕭蕭愁殺人」とは、第一群古詩「驅車上東門」にいう「白楊何蕭蕭」に、古樂府歌詩『太平御覽』卷二十五引の辞句「胡地多颯風、樹木何蕭蕭」と「秋風蕭蕭愁殺人」とをアレンジしつつ組み合わせて成った表現であろう。更に、詩全体の発想様式としても、かの「驅車上東門」詩が提供する「門を出て遙か彼方に墳墓を眺める」というパターンが踏襲されている。ただ、本詩において最も印象的に描写されるのは、壮大に造営されていた墳墓の、凋落したその後の姿であって、このことは、かの詩にいう「松柏夾廣路」と本詩にいう「松柏摧爲薪」との間の落差が端的に示しているだろう。同じ松柏でありながら、片や広い墓道を挟んで盛大に植えられ、片や摧かれて薪となつているのである。ところで、後漢の順帝—桓帝期（二五—二六七）頃の人である王符の『潜夫論』浮侈篇には、近年京師の貴戚の間に、盛大に墳墓を営み、周圉に広く松柏を植えるような贅沢がはびこつていふことを記すが、この記述に拠るならば、「驅車上東門」詩は、後漢中期以前の上層階級における奢侈の風潮を色濃く反映するものと言えよう。そして、これを踏まえた上で敢えて反転させ、崩壊した墳墓に人生の無常を描き出そうとする本詩は、かの第一群古詩の後続作品であると思つてよいように思われる。

以上の事例から見ると、第二グループに属する古詩は、第一群のそれに比べて相対的に新しいとせねばならない。鍾嶸の紹介する旧説に、「陸機所擬」でない「其外」の古詩を、建安文壇の曹植や王粲の作ではないかと疑つてゐるのは、誠に一理あることであつた。なお、第二グループの相対的新しさは、用語の側面からもこれを論証し得るように思われるが、本稿では触れない。要するに、陸機擬する所となつた第一古詩群は、第二グループの古詩に比べてより古い時代に成立し、後続の古詩作家にとって拠るべき規範となつた、五言古詩の源流とも称し得る作品群

である、というのが本章における結論である。

ただ、上文にて指摘してきたことは、陸機の擬する所でない第二グループの古詩全てについて当てはまるものではない。中には、第一古詩群とはほとんど何の関連性も示さず、他方、古楽府とのみ強い繋がりを見せる「生年不滿百」<sup>(9)</sup>詩や、第一古詩群はおろか、現存する古詩・古楽府のいずれとも無縁であるように看取される「上山采藤蕪」詩の如きものもあって、それらの詩篇の位置付けは、上述の論法からすれば、全く未詳とせねばならない。このような作品を混在させているところに、鍾嶸が「頗る總雜と爲す」と評した所以もあるだろう。とはいえ、大局的には、「冉冉孤生竹」「去者日以疎」等の詩において検証してきた通り、第二グループに属する古詩の多くは、第一古詩群の精髓を発想源としながら、これに新たな工夫を加えて成った、第一古詩群の系譜上に連なる作品であると言える。第二グループの古詩、更に敢えて言えば建安時代の五言詩をも含めたそれが、発想や表現の面において思いの外相近似するということは、それらが、時代背景を同じくしつつ、各地で自然発生的に誕生したことを物語るのではなく、むしろ、その多くが、第一古詩群という同一の源流から派生したものであることを意味していると私は考える。なお、付け加えるならば、「古詩」との類似性がしばしば指摘される一連の「李陵録別詩」は、第一群の古詩はもちろん、第二グループに属する古詩をも踏まえる表現が散見し、しかも「李陵詩」内部でのみ共有する詩句を相当数持つことから考えて、いわゆる「古詩」よりも更に遅れて、ある特定の主題の下に一派を為した、いわば支流の如き位置を占める作品群であるように思われる。

### 三

陸機の擬する所となった第一古詩群は、第二グループに属する古詩よりも古い時代に成立し、それら後続の古詩生成のために豊富な発想源を提供した、五言古詩の源流とも称すべき作品群であった。それでは、この第一古詩群は、いつ頃、どのような経緯を経て、一つの詩群を成すに至ったのだろうか。この問題については、未だ推測の域を出てはいないのだが、現時点での私なりの見通しを述べてみたい。

陸機擬する所の古詩について（柳川）

さて、先にも触れたとおり、第一古詩群はその内容に一貫性を見出し難い。そればかりか、同じ第一群に属しながら、その成立年代に前後の隔たりがありそうなものさえ認められる。たとえば、「西北有高樓」詩と「東城高且長」詩とは、結びの句にそれぞれ「願爲雙鳴鶴、奮翅起高飛」、「思爲雙飛燕、銜泥築君屋」といい、ともに同一祖型<sup>10</sup>に拠つたらしい形跡も露わであるが、しかし後者は、一對の鳥になりたいと詠ずるのみならず、君の家に巢をかけたといふ別次元の願いを加えていること、そして、詩中にて呼びかける対象が、前者では一對の鳥の片方に重なっているのに対して、後者ではその鳥から乖離し、家屋の主人へとすり替えられていることから見て、後者は前者よりも遙かに祖型からの離脱の程度が大きいと言える。他方、この兩詩は「音響一何悲」という句を共有しており、同一の系列に連なる作品であること明白である。このように見てくると、「東城高且長」詩は、同じ第一群に属する「西北有高樓」詩の後続作品であろうと推定せざるを得ない。

第一古詩群は、各詩篇の成立年代という側面から見た場合、一つのまとまりを為す作品群としては今一つ凝集性に欠ける。このことを物語る別の事例として、いずれの詩群に属するか未詳の「迴車駕言邁」詩を挙げることでもきる。この詩には「人生非金石、豈能長壽考。奄忽隨物化、榮名以爲寶」という一節が見えるが、これを第一群古詩「青青陵上柏」にいう「人生天地間、忽如遠行客」、同「今日良宴會」詩にいう「人生寄一世、奄忽若飄塵」、同「驅車上東門」詩にいう「人生忽如寄、壽無金石固」と突き合わせてみるに、「迴車駕言邁」詩は、第一群古詩の三首と「人生」「金石」「奄忽」という特徴的詩語を共有していることが認められる。他方これを、紛れもなく第二グループの古詩と判断される「悲與親友別」詩の「人生無幾時、顛沛在其間」という句と比較してみた場合、内容としては近いと思われるものの、表現上はかなり隔たりのあることが看取されよう。「迴車駕言邁」詩は、明らかに先に挙げた第一群古詩の三首の方により近く、仮にこれをかの諸篇と同じ詩群の中に含めても不自然ではないようにさえ思われる。ただ、この詩は、「物化」という道家的哲学用語（『莊子』刻意篇に見ゆ）を用いていること、またその作者の立脚点が、かの諸篇に通底していた酒宴という場を離れ、個人的詠懐詩として深化しているように見受けられることから、先の三首よりはかなり遅れて成ったもののように感受される。ともかく、第一古詩群の境界線は、後世の我々から見ると、このように甚だ曖昧模糊としている。

以上に述べた第一古詩群の時間的拡散性は、その詩に詠ぜられた具体的事物からも看取されるところである。まず、明らかに後漢時代を指し示しているものとして、たとえば、『文選』李善注にも指摘するところ、「驅車東門」詩にいう「上東門」とは、後漢の都洛陽に実在した城門の名であるし、また「青青陵上柏」詩は、遊興の場として後漢の南都「宛」と首都「洛」とを挙げてゐる。ところが一方、第一古詩群の中には、前漢の宮廷文化に直結するような事物を詠み込んでゐる詩も確かに存在するのであつて、たとえば「蘭若生春陽」詩や「涉江采芙蓉」詩に見える香草は、実際かの上林苑にも多種多様に植えられていたらしい(司馬相如「上林賦」、また「迢迢牽牛星」詩に詠われた牽牛織女の恋物語は、上林苑の一角、昆明池の左右の岸辺に各々の石像が別個に置かれ、雲漢に隔てられたその悲恋が現実具象化されていたらしい(班固「西都賦」、張衡「西京賦」)。ここを以て短絡的にその詩の成立を前漢と看做すことはできないが、それでも、第一古詩群の中には、前漢宮廷文化に由来する事物を詠んだ詩篇が相当数含まれてゐるとは断定してもよいだろう。

要するに、第一古詩群は、幾歳月かの間に作られ伝えられてきた様々な内容の詩篇を包括し、しかもその諸詩篇を括る境界線は、現時点から見たとくも必ずしも明瞭ではない。だが、一見雑多なように思えるこの作品群は、既に繰り返し確認してきたように、遅くとも陸機「擬古詩」の成つた西晋時代には、確かに一つのまとまりを為して流布し、その他諸々の古詩篇とは一線を画すべく認識されていたのである。とすると、そこには人為的操作の加つたことを想定せざるを得ない。第一古詩群とは、幾つかの同質の詩篇が自ら寄り集まつて成つた作品群ではなく、ある時期、ある場において、極めて人為的にまとめ上げられたものではなかつたか。だからこそ、この第一古詩群は強力な伝播経路を得て大いに世に流通し、前章にて見てきた如く、後統の古詩作家のために豊かな素材と抛るべき模範とを提供し得たのではないだろうか。

それでは、この第一古詩群の成立はいつ頃と見るのが妥当だろうか。この問題に関しては、従来、五言古詩を民間文芸に発祥するものとして位置付け、その一応の完成期を、建安年間(一九六―二一九)を含めた後漢末と推定する説が大勢を占めてきたように思われる。<sup>(1)</sup>この説は、五言古詩と建安詩との発想上内容上の類似性に着目し、これを同時代の産物として見る立脚点に立つものである。だが私は、これまでに縷々述べてきたように、古詩を自然発

陸機擬する所の古詩について(柳川)

生的民間詩とは看做さない。また、古詩と漢魏詩との近似性は、後統の作家たちが、古詩の中でも別格の一群を仰ぎ、これを模倣し踏襲した結果生じたものであると考える。このような視点から見ると、五言古詩の源流たる第一古詩群の成立が、建安時代よりも大幅に遡るとしてもならぬ都合はない。

第一古詩群の成立年代について、具体的に推測するならば、後漢の安帝・順帝期（一〇六一—一四四）を下ることはまずないと思われる。なぜならば、この頃活躍した張衡（七八—一三九）の作品には、その随所に古詩踏襲の痕跡がありありと認められ、第一古詩群がこの時期既に十分流布していたことを物語っているからである。たとえば、その最も端的な例として、「怨詩」『文選』卷二十三、王粲「贈士孫文始」詩善注引にいう「同心離居」は、第一群古詩「涉江采芙蓉」の「同心而離居」を踏まえること疑いを容れない。もちろん「同心」と「離居」とは、それぞれ『易』繫辭伝上にある「二人同心、其利斷金」、『楚辭』九歌、大司命にいう「折疏麻兮瑤華、將以遺兮離居」に典拠を持つ詩語ではあるが、この二つの語が出会ったのは、他ならぬこの古詩に於いてだからである。また、「四愁詩」四首『文選』卷二十九に繰り返し現れる措辭「路遠莫致之」も、『毛詩』衛風、竹竿にいう「豈不爾思、遠莫致之」よりは、第一群古詩「庭中有奇樹」にいう「路遠莫致之」の方をより強く念頭に置いた表現である可能性が高い。というのは、本詩はこの外にも、「明月何皎皎」詩にいう「淚下沾裳衣」を踏まえた「側身西望涕霑裳」の類の句を各首毎に変奏しつつ畳み掛けるなど、作品全体として、古詩の作風を濃厚に承けていることが明瞭に看取されるからである。

張衡から更に遡って、明帝・章帝期（五七—八八）の傅毅「舞賦」『文選』卷十七にも、明らかに第一群古詩を踏襲する辭句として、「明月何皎皎」詩の冒頭句を用いた「夫何皎皎之閑夜、明月爛以施光」、また「東城高且長」詩にいう「蟋蟀傷局促」を踏まえた「哀蟋蟀之局促」という句が見出せる。後者の用例に見える「蟋蟀」とは、『毛詩』唐風的一篇名であり、内容もまたそれを踏まえるのだが、ただこれに「局促」なる形容詞を組み合わせるのには「東城高且長」詩独自の表現である。となれば、傅毅が直接意識したのは『毛詩』よりも古詩の方であったこと明白である。この「東城高且長」詩は、上述の如く、第一古詩群の中でも比較的新しいと判断される詩篇であるから、傅毅がこれを踏まえているということは、少なくともこの頃までには、第一群古詩の概ねは出揃っていたということ意味しよう。それらが一つの詩群にまとめられたのも、あるいはこの頃であったかもしれない。なお、傅毅とい

えば、前章にて取り上げた「冉冉孤生竹」詩が、『文心雕竜』においては彼の作と断定されていたことが想起される。その当否は判断できないけれども、「舞賦」における古詩の影響の深さから見て、このような説が生まれるのももつともなことと思われる。

それはともかく、第一古詩群の成立がかくも早かったのだとすると、後漢中期以前、文人による五言詩がほとんど残されていないのはいったいどういふわけだろうか。推測するに、この時代、五言という詩型は未だ知識人の正統的文学のスタイルとしては公に認められておらず、ある特定の場において私的楽しみとして行われるに過ぎなかったのではないだろうか。彼らが士人としてその本懐を詠ずるとすれば、新興の五言詩型によるのではなく、『詩経』以来の伝統を持つ四言によってであっただろう。古詩と称せられる作品の修辭的水準の高さを思うと、読み人知らずとは、無名の民間人を意味するのではなく、作者がその名を公表するのをためらった結果の無署名ではなかったかとさえ想像される。たとえば、先にも言及した張衡は、相当深く古詩を愛好していたと見受けられるにもかかわらず、その作品中、現存する五言の歌詩は『玉台新詠』(卷二)所収の「同聲歌」一首のみであるが、このことは、当時における五言詩の文学的位置付けの低さを示唆しているように思われる。

さて、ここで再び考察の対象を第一古詩群へ戻すことにして、五言古詩の源流とも称し得るこの作品群は、いったいどのような場において誕生したのだろうか。恐らくそれは、前漢末から後漢初めにかけての、上層階級の社交界においてであっただろうと私は推測する。前漢末の成帝期(前三一―前七)頃、武帝の創始した上林楽府や後宮の宮人たちを中心として、淫靡な俗楽、いわゆる鄭声が一世を風靡したが、『漢書』礼楽志、もともと軽俗な調子を持つ五言歌謡は、この軽佻浮薄な音楽に耽溺する貴戚百官の嗜好に対して大きな適応性を發揮し、それなりに芸術的裝飾を施されて演奏に供せられたであろうと推定されている。上林楽府は次の哀帝によって閉鎖されたが、朝廷外の富豪吏民の間では、その後も鄭声耽溺の風潮は衰えることがなかったというし、『漢書』礼楽志、また後漢時代に移行して後も、たとえば張衡「南都賦」(『文選』卷四)等の作品に見るとおり、都会の上流社会においては、艶麗な歌舞曲を伴う酒宴が依然として盛大に催されていたらしい。五言歌謡は、かかる場においていよいよ芸術的洗練の度を加え、恐らく、その幾つかは、後世にいわゆる相和歌辭として歌い継がれていったのではないか。そして、これと



同じ詩型を持つ五言古詩もまた、この漢代上層階級の社交場を舞台に、五言歌謡からの影響も少なからず受けながら生成展開していったと推測されるが、この五言古詩の源流に位置するのが、本稿にいう第一古詩群であった。もしこのような見通しが得られるならば、内容やディテールの面で一見雑駁のように思われた第一古詩群の諸作品も、一つの系統の中に各々その出自を求め得るように思う。

### 結語

以上、陸機の擬する所となった古詩が、五言古詩の源流とも称すべき別格扱いの詩群であったことを論証した。ただ、この第一古詩群の成立経緯、及びその年代については、本稿ではごく大まかな見通しを述べたに過ぎない。それらの諸篇が何処において誕生したのかという問題をも含めて、今後も検証を継続してゆきたいと思う。他方、陸機がその「擬古詩」において、後続の古詩を全く無視し、その源流たる第一古詩群のみを模擬対象としたことについて、私はそこに、彼のある思いを強く感ずるものであるが、このことについては、後漢末から三国を経て西晋に至るまでの、五言古詩の流行状況を俯瞰しつつ、また一方、西晋文壇における陸機の位置について見極めた上で、稿を改めて論じたい。

### (付記)

本稿は、一九九九年四月三日、青山学院大学において開催された、六朝学会第一回例会での口頭発表をもとに、新たな調査・検討を加え、私なりに一応の立論が成ったと思う所をまとめたものである。

当日助言を賜った方々に、深く御礼申し上げます。

(注)

- (1) 許文雨『文論講疏』(一九三七年、台北正中書局刊)に指摘するとおり、『芸文類聚』卷四十一、樂部(論樂)に引く陸機「駕言出北闕行」、題目の下に「驅馬上東門」の五字あり。馮舒校本に「意是題下注、今混寫耳」と。従うべきである。
- (2) このことは、かつて「陸機「擬古詩」試論」(『筑紫女学園大学国際文化研究所論叢』第二号、一九九一年一〇月)の中で論じたことがある。
- (3) 許文雨前掲書に引く吳汝綸『古詩鈔』に指摘する。
- (4) 岡村繁氏『『文選』編纂の実態と編纂当初の『文選』評価』(『日本中国学会報』第三十八集、一九八六年)を参照。
- (5) 吉川幸次郎記録、詩品研究班「鍾氏詩品疏(一)」(『立命館文学』第二三二号、一九六四年)、及び高木正一訳注『鍾嶸詩品』(一九七八年、東海大学出版会刊)。興膳宏氏訳注『詩品』(一九七二年、朝日新聞社刊)中国文明選『文学論集』は、「陸機所擬」古詩と枚乗「雜詩」との関係に言及しながらも、それ以上の解釈は為していない。
- (6) 「蘭若生朝陽」詩、『文選』李善注では「枚乗樂府詩」として引用する(卷二、張衡「西京賦」、卷三〇、陸機「擬古詩」、卷三四、曹植「七啓」)。
- (7) 石川三佐男氏「中国前漢「君有行鏡」の銘文について―古詩行行重行行篇との比較に及ぶ―」(『専修国文』第四十六号、一九八九年)を参照。
- (8) この古歌は、魏の甄皇后「塘上行」にも「邊地多悲風、樹木何蕭蕭」なる類似句が見え、漢魏時代、広く人口に膾炙していたことを窺わせる。
- (9) 「生年不滿百」詩と「西門行」とは、従来しばしば古詩と古樂府との近似性を示す好例として挙げられてきたが、実はこの詩は、晋樂奏する所の「西門行」に酷似する一方、第一古詩群との間に類似句をほとんど持たないという点において、数ある古詩の中でも極めて特殊な作品である。

陸機擬する所の古詩について(柳川)

- (10) 漢魏詩に頻見する発想パターン。古いところでは、舞曲歌辞「淮南王」に「願化雙黃鶴、還故鄉」と。この作品は、晋の崔豹『古今注』（『樂府詩集』卷五十四引）によれば、淮南王の家臣小山らが、登仙した主君を追慕して作った歌辞であるという。恐らくは、この種の措辞は本来、死者との交感を主題とする文芸の常套句であったと推察される。
- 「西北有高樓」詩は、西北という特定の方角を指し示すこと、また「淮南王」と同様に、天空に連なるが如き高樓を登場させることなどからして、この系統の発想の根源にある呪術的要素をなお残しているように看取される。
- (11) 鈴木修次「古歌・古詩考」（一九六七年、大修館書店刊『漢魏詩の研究』）に、古詩の成立時期に関する従前の諸説を整理紹介した上で、制作年代よりは民間における流行期の方に着目しようとする新たな視点を提起する。古詩関連の論文では比較的新しい松家裕子氏「抒情的五言詩の成立について」（『中国文学報』第四十二冊、一九九〇年）も、基本的発想は鈴木論文の延長線上にある。他方、これとは全く別の観点から五言詩を捉えるのが、岡村繁氏「五言詩の文学的定着の過程」（『九州中国学会報』十七卷、一九七一年）である。本稿は、岡村論文に大きな啓発を受けた。
- (12) 『文心雕竜』明詩篇に「又古詩は佳麗にして、或は枚叔（乗の字）と稱するも、其の「孤竹」の一篇は、則ち傅毅の詞なり」と。ここにいう「其」が、枚乗作として伝わる古詩群を特定して指示しているのだとすれば、傅毅を、第一古詩群の編者として想定することも可能かもしれない。つまり、傅毅は、古来伝わる別格の古詩篇をまとめ、これに自作の模擬詩を付して一篇の作品集に仕立て上げたのではないか、という想像である。ちなみに傅毅は、前述の張衡と共に、枚乗の善くした「七」の文体の有力な継承者の一人である（曹植「七啓」序）。ただ、『文心雕竜』一篇の史料に拠ることは殆うい。
- (13) 岡村繁氏の前掲論文（注11）を参照。
- (14) このことを推測させる一史料として、張衡「南都賦」にいう「彈箏吹笙、更爲新聲、寡婦悲吟、鸚鵡哀鳴、坐者悽歎、蕩魂傷精」、その李善注に「寡婦曲未詳、古相和歌有鸚鵡之曲」と。